

プログラムノート

かんばら ひとし

音楽には「リズム」「メロディ」「ハーモニー」という3つの大きな要素があります。なかでも「メロディ（旋律）」は、その曲にしかない独自の表情を持ち、私たちの心に直接語りかけてくる不思議な力を持っています。本日は、そんな「メロディの魅力」を存分に味わっていただける名曲を集めました。

チャイコフスキー：バレエ音楽『くるみ割り人形』より「ジゴーニュおばさん」

ロシアの作曲家チャイコフスキーによる華やかなバレエ音楽です。チャイコフスキーは「メロディの魔術師」と呼ばれ、一度聴いたら忘れられない美しい旋律を生み出す天才でした。この「ジゴーニュおばさん」は、大きなスカートの中からたくさんの子供たちが飛び出して踊る、ユーモアたっぷりの場面です。弾むようなリズムに乗って奏でられる明るく親しみやすいメロディが、会場を一気に物語の世界へと誘います。

ビゼー：歌劇『カルメン』組曲



フランスの作曲家ビゼーの傑作です。元は歌手が舞台上で歌う「オペラ」ですが、この管弦楽による組曲は言葉がないのに、なぜこれほど愛されているのでしょうか。メロディそのものが「歌う人の心情」や「場

の情景」を雄弁に物語っているからと私は感じています。

1.闘牛士「カルメン」といえはこの曲。シンバルが目立ちますが、大太鼓もかっこいいです。**2.前奏曲**はこのオペラの悲劇的な結末を感じさせます。**3.アラゴネーズ**は闘牛場前広場で始まる第4幕への前奏曲です。**4.第3幕への間奏曲** **5.アルカラの竜騎兵（第2幕への間奏曲）**この2曲では、ある楽器が奏でたメロディを、別の楽器が追いかけるように演奏する場面があります。しかし、それは決して単なる「コピー」ではありません。同じ旋律であっても、演奏される楽器によって音の肌触りが違います。さらに、奏者一人ひとりがこれまで積み重ねてきた練習の記憶や、人生の経験といったその人自身の「歴史」が音に宿ります。同じメロディが受

け継がれる瞬間の、二度と再現できない「かけがえない個性」の響き合いを感じてみてください。**6.ハバネラ**はカルメンが「恋は野の鳥（気まぐれ）」と歌う名シーン。半音ずつ階段を下りてくるようなメロディが、彼女の妖艶な魅力を引き立てます。**7.闘牛士の歌**は酒場で闘牛士エスカミーリョが歌う色男の歌です。**8.衛兵の交代（子どもたちの合唱）**は子どもたちが衛兵の交代を真似をしての行進。**9.ロマ（ジブシー）**の踊りは酒場でカルメンと2人の女たちが自由奔放な彼女らの恋とジブシーを語る曲です。

チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 Op.64

全曲を通して、ある共通のメロディが登場します。これは「宿命のテーマ」と呼ばれ、時には暗く重苦しく、時には勝利を宣言するように高らかに響きます。聴きながら探してみてください。

第1楽章では、暗さや激しさだけでなく、上へ向かうメロディと下へ向かうメロディが交錯し、複雑な感情の世界を見せてくれます。**第2楽章**はホルンの美しく、切ないメロディが聴きどころです。チャイコフスキーのメロディがなぜこれほどまでに私たちの心を掴むのでしょうか。彼が自身の喜びや深い悲しみ、葛藤といった「生身の人間としての感情」を、一切の妥協なく音符に託しているからかもしれません。チャイコフスキーらしい優雅なワルツの**第3楽章**は木管楽器の聴かせどころ。力強く始まる**第4楽章**は苦難を乗り越え突き進む勝利のフィナーレです。

「クラシック音楽は楽譜に忠実に演奏される」と言われます。その通りだと思います。しかし、「楽譜に忠実」は「音符の通りに演奏する」だけとは違います。楽譜はいわば「芝居の台本」のようなもので、そこに書かれていることは、全体の30%程度でしかありません。残りの70%は、今ここで楽器を鳴らしている演奏者に託されています。私たち演奏者は、音符をなぞるだけでなく、その背景に何があるのかを常に考えています。作曲家がなぜこの音を選んだのか、その裏に隠された意味や感情、喜びや涙は何だったのか、その時の社会情勢はどうだったのか。音符という文字の裏側に込められた想いを読み解き、オーケストラのメンバー全員が全力を尽くして紡ぎ出す「今の響き」を、どうぞお楽しみください。